

佳作

夢みる未来の私へ

山形県鶴岡市立朝日中学校

2年 有賀 咲星

「私は、ダンスに関係のある仕事がしたい。」こんなふうに私は断言することができない。なぜかという、ただの夢であり現実的に将来に結びつかないからだ。言えばどんな言葉が相手から返ってくるかだいたいわかる。だから私は「わがんね。」と、いつも同じ答えしか言わない。自分の周りでは進路についてみんな歩み始めている。友達の一は小学校のころから将来の夢が決まっていて、ほかのみんなも目標を決めて前を見て歩いている。私はそんなことはどうでもいいと思いながらも実はすごく不安だ。

いつも「わがんね。」と答える自分が嫌でしようがない。私の弟はスポーツ選手になりたいと言っている。まだ現実にはほど遠い夢を語る事ができて幸せだ。私も昨年までは同じような考えだったと思う。小さい頃はケーキ屋さんになりたいと思っていた。たくさんの美味しいケーキをお腹いっぱい食べられると思っていたからだ。本当になれると普通に考えていた。しかし、いつのまにかその夢は忘れていた。でも、なりたいというだけで夢を持っていた小さい頃が私にとって一番純粋で楽しいときだったのかもしれない。だが今はそんなことは言っていられない。自分以外のみんなは将来がきちんと見えているのだ。

そんなことで悩んでいると、いつも叔母が相談にのってくれる。そして自分の体験を話してくれた。叔母は、中学校の頃から福祉の道を選んで、高校では総合学科を目指し、大学でも4年間専門の知識や資格をとり、希望通りの仕事に就くことができた。でも、結婚、出産、育児があってこの仕事は大変だと思うようになったということだった。今は頑張っって難しい資格に挑戦して、自分に合った仕事時間や休みの取り方ができる部署に変わることができた。ずっと夢を追い続けかなえてそしてそれに満足せずに上を目指して今がある。叔母が選んだ道は今の私にとって理想で、自分は無理だと思うようになった。実際ダンスが好きでも仕事になると、どこでどう学べばいいのか進む道も分からないし、そんな仕事があるのかも分からない。やっぱり夢は夢でしかないのだろう。私の夢は将来には届かないのだ。だから誰に何を言っても無駄で、自分の心の中で押さえておくしかない。ただの憧れでしかないのだから。現実的な夢を探して、それが自分の目標と言い続けるしかないのだ。そんな時もう一人の叔母が話してくれた。小学校4年の頃から保育士になりたいとずっと思い続け、高校、大学と専門知識を学び資格を取り、そして保育士の道へと進むとあってい

たのだが、突然「保育士にはならない」と全く別の仕事に就いたのだ。「えっ！何で？」と私は不思議に思った。ずっとずっと夢を追い続けてその100のうち99まできたのに、100でやめてしまった。ほとんど夢はかなったのと同じなのに自分からやめてしまった。叔母は「ずっと学んできたから現実の厳しさがわかりすぎて夢よりも現実をとった。あの選択は間違っていたとは思わない。むしろ良かったと思っている。」と言っていた。こんなこともあるんだなあと驚くばかりだった。二人の叔母はずっと前から将来を決め、一人は夢を実現し、もう一人は別の道へと進んだ。二人の選択はまったく違うものだけれど今の仕事に誇りを持ち生き生きして、何よりとても楽しそう。笑っている二人の顔を見て、なんとなく肩の力が抜けていくような気がした。私は今まで何を悩んでいたのだろう。私はずっと怖かったのかもしれない。いくら夢を持っていても、絶対にはかなわないと心の中で決めつけていた。でも、叔母の話聞いてそれでもいいと思うようになった。私は自由に夢を持ちたいと思うようになった。

今夢を持たないでいつ持つのか、今だから夢を見ることができると。「夢イコール現実」に囚われ過ぎていた自分ようやく気付くことができた。私の今の夢はダンスをすること。ダンスが大好きだ。

未来の私は何をしているだろう。中学2年の時に持った夢をかなえているだろうか。それとも別の道に進んでいるだろうか。たくさん悩んで、たくさん迷って、本当に自分になりたい自分になれるのだろうか。でもきっとどこからでも本当の自分になれる。どこからでも一からスタートできる。選択肢は山ほどあるのだから。自分に正直になるということを忘れないで頑張っているだろう。そして二人の叔母のように生き生きした生き方をしてほしい。いや絶対に未来の私は夢をかなえて笑っているだろう。そんな自分を誇らしく思っているに違いない。

もう私は迷ったりしない。だって夢は誰にでも自由に追いつづけることができるはずだから。